

<リスクと不確実性について>

社会科学(経済学)では、

過去のデータ等で将来起きることの確率が推測できる場合は「リスク」、

何が起きるかわからない場合を「不確実性」といっている。

(リスクの例:過去のデータを見ると貸した金の1%は返ってこない → 金利を1%上乘せする

← 事前に備えることができる、対応を理性的に考えることができる)

(不確実性の例:バブルの中においてバブルと気付く人はほとんどいなかった → 不良債権の山ができた

← 事前に備えることができなかった、対応を理性的に考えることができなかった)

自然科学では、上記を分けずに、「確率」を考えてきた。

(但し「予測不能なカオス」など、限界性を探る理論は昔からあったし、

近年では「自然科学にも不確実性は存在する」との見方も有力になっているが・・・

参照: <http://www.nhk.or.jp/hakunetsu/japan/lecture/111030.html>)

社会科学(経済学)における「リスク」は、

主として人間の新しい脳によって「不確実性」を軽減・克服し、

将来起きることが推測できる領域となったものである。

.....

<本稿の基本的な見方>

人間以外の生物も、単細胞生物の段階から、

危険物に繰り返し近づかない「学習能力」を持ち、

群れ行動を行う(秩序発生)ことで、知的行動をとっている(群知能・集合知)。

また、長い進化の過程の中で、

危険物をDNAの中に記録したり、新たな能力を獲得したり、

他者からの学習や経験伝授等の能力を獲得したり、社会性を獲得したり、

リーダーを作るようになったりして、「不確実性」の軽減・克服を行ってきた。

しかし、大脳による思考では、人間ほどには対応できない。

.....

<立っている位置に違いがある>

社会科学(経済学):

人間は、不確実性に囲まれていても、「日々」何かしなければ生きていけない。この位置から見ると：
社会科学では「事前に推測できるか・できないか」は大問題である。

また、備えすぎると非効率になるバランスがある。

(例：明日の天気はわからない。しかし××に行かなければならない) ← ↓ 折り畳み傘がなかった頃の話

(例：天気予報が正確ならば、必要な時だけ傘を持って出かければよい)

(例：正確でなければ、いつも傘を持って出かけなければならない。それでも竜巻にあうこともある)

(起きるわけがないと笑っていたことが起きた後は、一転して、事後処理や責任問題で大混乱となる)

→ リスクと不確実性を分けて考える。前者については確率を正確化し、後者は軽減・克服しようとする。

自然科学：

自然科学では、何か「新たに」発見・解明・発明するとプラスが出てくる。この位置から見ると：

(例：天気予報が正確になれば、社会に大きな幸福をもたらす)

(例：地震予知が正確になれば、悲惨な災害を軽減することができる) ← 今日的課題

→ 両者を分けることは先に限界を認めることになる。未知なるものを解明することに喜びを感じる。

.....

本稿は、生物的視点から、人間の経済現象を考察するものである。

従って、基本的には「不確実性」という用語を使用しているが、

自然科学との対話が混乱するため、一部では「リスク／不確実性」という用語も併用した。